

歌川国芳にみる運動表現と絵手本利用

—《通俗水滸伝豪傑百八人之一個（一人）》の制作を巡って—

中山 創太（関西大学大学院）

歌川国芳（寛政九—文久元年・1797—1861）は、文化—万延元年（1804—60）にかけて江戸で活躍した浮世絵師である。国芳は文化五年（1808）頃に歌川豊国に入門するものの、文政十年（1827）頃に《通俗水滸伝豪傑百八人之一個（一人）》（以下、《通俗水滸伝》と略称）の揃物を刊行するまで、長い間雌伏の時期を過ごしていた。しかし、当時の国芳に関して『浮世絵師歌川列伝』には「愈々奮つて畫法を研究せり」と記されており、この時期の作品を見ても分かるように、国芳は画技の向上に取り組んでいた。諸氏の研究により、国芳が葛飾北斎に私淑していたこと、勝川派の武者絵作品を参考としていたことなどの指摘がなされてきた。しかし国芳が、それらのどの作品からどのように学習を行っていたのか、という具体的な事例を挙げて言及することは、あまり行われてこなかった。また、《通俗水滸伝》の揃物において特異な表現の一つである刺青の意匠については、当時の刺青文化に影響を与えた、という見解に止まっており、同時に意匠に関する研究も看過されてきたといつてよい。しかし、刺青の意匠を考察したところ、従来に指摘されていた影響だけでなく、その図様に享保年間（1716—35）に大坂で盛んに制作された絵手本が利用されていることが見出せるのである。

まず、文化（1804—17）末期に制作された国芳の最初期の武者絵作品をみていくと、勝川派の作品にみられるような、人物が取っ組み合う場面が多く描かれている。また、動作の瞬間を捉えようとする国芳の運動表現を見出せるが、未だ発展段階でどこもない描写となっている。この「動き」の描写は、文政年間（1818—29）以降の武者絵作品においても顕著にみられる。加えて、この時期の作品から北斎の影響を指摘できる描写を見出せるようになり、画法の学習範囲が拡大していることが判明する。

次に、文政十年頃に刊行された《通俗水滸伝》の揃物では、先に述べた表現に加え、洋風画表現や橘守国、大岡春卜らが制作した絵手本から着想を得て、躍動感に充ちた画面が描出されているのである。その上、国芳は運動表現に富んだ姿勢をとる豪傑たちの刺青の意匠に、絵手本の図様を転用するだけでなく、そこに描かれる動物や神獣に表情をつけたり、動きの表現を加味したりするなどの改変を加えることで、趣向を凝らした作品を制作している。

以上のことから、本発表では国芳の初期武者絵作品から《通俗水滸伝》の揃物に至る作品を中心に、国芳における画法の研究の変遷を考察し、さらに絵手本利用や刺青の意匠との関係を明らかにすることを目的とする。結論としては、国芳は典拠となる図様を転用しながら、それらに「瞬間」を示す動きの表現を採り入れることで、独自の表現を確立したといえるのである。